



第二次世界大戦も末期に近いころ、学生の勤労働員で、京都伏見のネジ製造工場に通っていた私はほとんど音楽に触れることができなかった。ラジオで放送される唯一の西洋音楽は、今では考えられないようなことであるが、「前線に送る夕べ」というレギュラー番組のテーマ音楽、ハイケンスの「セレナーデ」だけであつた。音楽に飢えた私は、休日には必ず、知っている限りの京都市内の新品、中古品のレコード屋を血眼になつて漁りまわっていた。

そうしたころ、三条河原町の朝日会館でレコードコンサートがあり、ベートーヴェンの「エグモント序曲」と「第五シンフォニー」を聴く機会があつた。舞台上に大きい電気蓄音機が置いてあり、それだけであつたが、私にとっては初めて聴くベートーヴェンのシンフォニーであつた。トスカニーニ指揮のその五番を聴いた時、私はどうやって家に帰つた

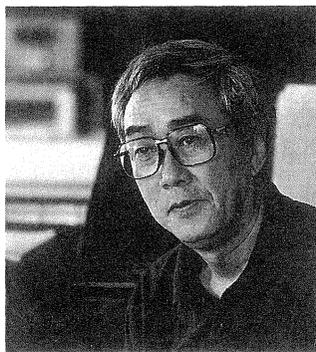
半世紀を経た現在、世の中はその当時とは非連続としか言い得ない変わり方をしてしまつた。巷には音楽が足の踏み場もないくらいに散乱し、一〇〇〇人を超える大交響曲の演奏や、使い捨てと言えらるほどのその場限りの音の群れが、同じ広場に入り乱れるように同居している。一度、私はクラシックの著名な演奏家のリサイタルに行くのを間違えて他の会場に行つてしまつたことがある。そこは超満員でロックの音楽が鳴りひびいていた。私の聴く音であつた演奏家の名前を言つても、その会場にいるだれ一人、その名前さえも知らなかつた。

## 少年時代の宝物

まつむら・ていぞう 京都生まれ。作曲家。元東京芸術大学教授。紫綬褒章、京都府文化功労者章、東京都民俗文化栄誉章受章。主要作品「交響曲」、「ピアノ協奏曲1番・2番」、オペラ「沈黙」。

活かに溢れ、雑多な文化が充満し、毎日がいわばお祭り騒ぎである。フェステイヴァルという名前の催しものがいかに多いことか。それぞれがそれぞれの場で、めまぐるしく回転運動をしていて、自分以外の他の出来事には無関心である。皆が忙しく何かにせきたてられていくのである。過ぎたことはすぐ忘れられていく。ハングリーな少年時代の体験を引きつづけている私にはこのお祭りのテンポにどうしても乗つていけないものがある。あの時の宝物を見失つてもいいのだから、どこかでいつも囁く声があるのである。

## エッセイ Essay



松村禎三

か分からないぐらいショックを受けてしまった。半ば放心状態で三条大橋を歩いていた記憶がある。

また、ある時、京都の著名なレコード店のショー・ケースにたまたま倉庫の奥に残っていたものを出してきたのが、戦前の立派な装幀のベートーヴェンの「七番のシンフォニー」とメンデルスゾーンの「ヴァイオリンコンツェルト」のレコードが置いてあつた。店員が中年の婦人と長々と話している間に、私は後から入つて来る客にそれをとられまいとして、両肘をはってショー・ウインドウに蔽いかぶさつてかくしていた。このようにして出会つた一曲、一曲は私にとって命がけと言えるほどの宝物であつた。

三、四年後、終戦後の旧制高校生であつたとき、私は作曲を本職にすることに心を決めた。生涯をかけて、ベートーヴェンの足元へ少しでも近づこうことができればと本気に思いつめてのことであつた。

# 特集 文教施策 の 進展 平成6年度の展望

総説／文教施策の総合的推進／  
生涯学習／初等中等教育／高等  
教育／私立学校／学術研究／社  
会教育／スポーツ／文化／国際  
交流・協力／文教施設／参考

人・この道 平山郁夫  
教育・文化と地域づくり——岩手県三陸町  
都道府県発—教育・学術文化ニユース  
栃木県・千葉県

★新連載  
'96アトランタ—我が国競技スポーツの最前線  
JOC

## 編集 後記

▽今日、国民の文化への志向がかつてないほど高まってきていることや文化の発信と交流を通じて国際社会への貢献も強く求められてきていることから、「文化発信社会」を構築することが必要とされております。

今月号の特集のテーマは、この文化発信社会に焦点を当て、「文化発信社会に向けて」としております。昨年が、折しも文化庁の設置二五年であったことから本誌においても昨年一二月号で「文化庁設置二五年」を特別記事とさせていただいております。

また、昨年一月に公表された「平成五年度 我が国の文教施策」(白書)においては、文化発信社会が副題として掲げられているところであります。

本特集が、「文化発信社会」の構築の必要性や今後の課題等について、更に御理解を深めていただく一助となれば幸いです。

▽越年となっていた平成六年度の政府予算案編成が進められていた先月中旬に、東京は実に二十数年ぶりという大雪が降り、文部省の中庭にもドッサリと雪が積もりました。いろいろな出来事がありました。今年度も今月で最後であります。来月号からいよいよ平成六年度の内容となります。本号に新年度における特集テーマ、各種記事の企画の予定について紹介させていただきます。

新年度においても文教施策の重要な課題等を、分かりやすく、タイムリーに取り上げてまいります。引き続き御愛読のほど、また四月からの新人の方にも御紹介のほどよろしく願います。

(A・S)

### 投稿歓迎

『読者からのたより』欄への投稿を歓迎します。本誌を読んでの御感想、御意見等をどしどしお寄せください。

●投稿規定  
①一件につき四〇〇字以内 ②住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記(誌上匿名可) ③掲載分には薄謝進呈  
※文章を一部手直しさせていただくことがあります。

●送り先  
〒100東京都千代田区霞が関三—二—二  
文部省大臣官房政策課「文部時報」編集部

MESC 61 月刊

文部時報 3月号

第1407号

平成6年3月10日印刷  
平成6年3月10日発行

●著作権所有——文部省◎  
●発行所——株式会社 きょうせい  
本社 〒104 東京都中央区銀座7丁目4番12号  
(営業所) 〒162 東京都新宿区西五軒町4-2  
電話 03-3268-2141(代表) 振替口座 東京9-161番  
●印刷所——株式会社行政学会印刷所

定価550円(本体534円)(〒71円)  
年間購読料6,600円

・ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます。  
・なお、購読のお申し込みは直接営業所またはよりの書店にてお願いします。

●本誌の掲載文のうち、意見にわたる部分については、それぞれ筆者個人の見解であることをお断りいたします。